

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 () 平成20年度:24-25.

乳がん看護外来の取り組み：集団指導から個別指導へ

中村, 智美 ; 脇坂, 亜希 ; 小山内, 美智子

# 乳がん看護外来の取り組み～集団指導から個別指導へ

外来ナースステーション ○中村 智美、脇坂 亜希、小山内美智子

## 1. 緒言

クリニカルパスの見直しやDPCの導入により乳がん手術患者の在院日数が短縮化している。それに伴い、乳がん告知後の患者の意思決定支援や術後のセルフケアマネジメント支援等、外来看護師の役割が拡大している。今回、患者に必要な情報をタイミングよく提供することを目的とし、乳がん看護外来のシステムの整備と、スタッフ教育に取り組んだので報告する。

## 2. 実践

### 1) マンマ外来での取り組み

マンマ外来は1998年に開設し今年10年目を迎えた。外来病棟相互協力体制や入院看護加算など、病棟外来看護師の人員配置の影響を受け、運営の主体は流動的に継続してきた。

マンマ外来は「看護外来」という外来の個室ブースを使用し、1回/週、主に入院中の乳がん術後患者に集団での指導を実施していた。内容は①術後のリハビリ②リンパ浮腫の予防③創部ケアと乳房の補整、また、患者間で体験や気持ちを話し合う時間も大切にしていた。その他、個別指導として外来通院患者にリンパ浮腫に対する複合的理学療法の指導等を行っていた（H18年度121名、H19年度149名）。

### 2) アンケート結果をもとに患者ニーズの把握

2007年当院で実施したマンマ外来に関する患者アンケートの結果、集団での指導におけるピアカウンセリング効果も認められたが、一方で27%が個別指導を望んでいる現状が明らかになった。また在院日数の短縮により、週1回のマンマ外来ではフォローできない患者がいることも課題としてあげられた。

### 3) マンマ外来の体制の見直し

外来・病棟看護師でマンマ外来の有効な運営方法を検討した。結果、2008年4月から、病棟プライマリーナースが、クリニカルパスに添ってリンパ浮腫の予防指導を含めた退院指導を行い、さらに外来で退院後必要な指導を重ねていくことで個別的な関わりができるよう体制を整備した。外来での主な関わりは、リンパ浮腫に対する複合的理学療法の指導である。

### 4) パンフレットの作成と位置づけ

乳がんの患者教育においては内服薬や副作用対処、リンパ浮腫の予防等、患者の自己管理能力を高める関わりが重要である。そこで乳がんの診断から治療までのポイントをまとめたパンフレットを2006年に作成した。これを有効活用するために、入院予約の際患者にわたし、患者が医師のI.C.をよく理解して積極的に治療に参加し、自己管理できるように関わった。パンフレットには手術のクリニカルパス（患者用）も添付した。

### 5) 他部門との連携

- ①他部門・他職種との情報共有のためカンファレンスに参加（外来・放射線治療室・腫瘍カンファレンス）
- ②他部門看護師と連携し切れ目のない看護の提供（病棟・地域連携室・緩和ケア・放射線治療室・点滴センター）
- ③化学療法導入患者へのオリエンテーションをコーディネートし、安心して治療が受けられるようにセッティング

### 6) 外来看護師の教育

マンマ外来は2名の看護師で実施していたが、スタッフのローテーションに対する課題があった。また在院日数短縮による患者ニーズも増え、外来看護師が同じレベルで指導できるように教育計画を立てた。特にリンパ浮腫の複合的理学療法においては、トレーニングを要するため、リンパ浮腫指導技能養成講座受講看護師による実技を含む学習会を3回実施した。

## 3. 考察

### 1) 乳がんの患者教育

阿部<sup>1)</sup>は「退院指導の際には、患者の個性を重視しセルフケアを促す支援が不可欠」と述べている。乳がんの治療は長期間継続されるため、内服薬や副作用対処、リンパ浮腫の予防等、患者が主体的に治療に参加できるよう、患者の自己管理能力を高めるような関わりが重要である。

### 2) チーム医療における外来看護師の役割

長期に渡る患者の療養生活が継続できるように、他部門との連携をはかり、患者をサポートしていくコーディネート役がある。そのため他職種と関わるカンファレンスを実施・参加することで積極的に新しい情報を取

り入れて、タイムリーに患者ニーズにあった指導方法を検討していく必要がある。

#### 4. 引用文献

- 1) 阿部恭子：乳がん患者のセルフケアを促す退院指導のポイント, *Nursing Today* 22, (13), p5-7, 2007